

# 住井すゑとその文学の里(六十一)

―牛久沼のほとり―

牛久市文化財保護審議委員

栗原 功くりはら いさお

## 部落解放同盟全国婦人集会への出席と『橋のない川』執筆のための取材

部落解放同盟 第三回部落解放全国婦人集会へ出席

昭和33年(1958年)5月4・5両日に奈良市市庁舎別館で行われた、部落解放同盟第三回部落解放全国婦人集会。

住井すゑは2日とも参加し、第1日目の分科会は、第3分科会の「働く婦人のための話しあい」に出席した。

住井は、そこで聞いた部落出身のT・K氏の話を、『八十歳の宣言』の中で次のように記している。

『僕には二人の子供が居ります。一男、一女です。その女の子がよちよち歩きをはじめたある日、僕はいきなりつかまえて、首を締めようと思いました。親のよく目、ひいき目も手伝ってのことでしょうが、それは、

それは、可愛い子どもでして……。それだけに、僕はその子がそのまま育つのに堪えられなかつたのです。娘盛りに、どんな辛い思いをすることかと思うと、いっそ、今、自分の手でいきの根を止めてやるのが親心のような気がしましてネ。』

住井は、部落解放全国婦人集会の帰途、東京に立ち寄り、新潮社編集部にて佐野英夫を訪ね、「部落」を題材にしての作品を書きたいので、完成したら出版してほしいと申し入れておいた。

『書くべき作品の構想はほぼ決まっていた。住井自身が体験した事件を通して、部落の少年が差別に目覚め、解放運動につき進んで行く人生……を描きたかった。』

しかし、小説は積み重ねて書いていくものだから、住井のこれまでの部落の人々との接触だけではとても部落についての小説を書くことはできなかった。

住井が、京都の部落問題研究所に行った時のことであった。研究所の

創立者の一人である某氏から、「これは、私の生まれた部落の実態調査です」と言つて、『未解放部落の社会構造』(社団法人部落問題研究所、昭和29年6月1日発行)を手渡された。牛久沼のほとりに戻ると住井は、早速322ページの『未解放部落の社会構造』をなめまわすように読んでみた。が、部落の家々の生活実態がちつとも頭に浮かんでこない。『これは大和(現奈良県)のA部落に行つて見るしかないな』と、大和行きを決心した。彼女は、某氏に宛てて、A部落をこの目で見たいという内容の手紙を書いた。

『橋のない川』執筆のための取材―奈良・和歌山両県下へ―

住井が小説を書くために取材に出るのはこれが初めてであった。

住井が奈良・和歌山両県下の部落で行つた取材の資料については膨大な量なので省略しておくが、奈良県某郡某村A部落で出会つた一青年との会話の一部を記述しておく。

―女流作家などどうせ興味本位で部落を覗きに来るのだからといふかしがつたが、貧しく悲しい人々の率直な本音を吐いてくれた某青年がいた。某青年は住井に、『部落を小説に書くというが、なぜそんなことをする。小説の種なら他にいくらでもあつた。』と不審そうに聞いた。住井は、『部落出身でないからみんなの気持は、よく分らないけれど、部落の人に夢を与えたいの……』と答えたという。

引用文献、『橋のない川』住井すゑの生涯『北条常久著・風濤社刊。』住井すゑの世界その生涯と文学』前川む一編・解放出版社刊。その外。



↑『橋のない川』執筆のため奈良県下を取材中の住井すゑと兄住井辰蔵。